審査の結果の要旨

氏名　桑原　真木子

現代遺伝学の進展にともなって登場してきた「新しい優生学」は、生命倫理をめぐる重要な問題を提起している。本論文は、そうした今日的関心を持ちながら、戦後の教育学と優生学との関係について考察した論文である。

序章では、問題の所在を整理しつつ、分析の視角を提示し、いくつかの分析概念を設定している。特に、優生学の問題の核である「他者の存在を脅かす」という轍を教育学も踏んでしまうという関係を〈連接〉という語で示し、その後の分析の軸としている。第１章・第２章では、戦前期の優生学と教育学の関係に焦点をあて、二つの学問が相補的な関係にあり、教育学が「教育的環境の操作」という回路を通して、優生学と親和的な関係を取り結んでいたことを明らかにしている。第３章と第４章では、戦前の優生学と教育学の関係が、戦後どのように継続あるいは変化したのかを考察し、「人格」概念の重要性を抽出している。

第５・６章では、産児制限論争や「精神薄弱」者の断種問題の議論などに焦点をあて、「あるべき人格」をめざす教育的環境の操作が、「他者の存在を脅かす能力主義」に媒介されて、他者の事実存在や本質存在を脅かす論理につながっていたことを明らかにしている。第７章では、1960～70 年代の教育学の本流における学力論に焦点をあて、能力と人格と教育の関係を考察し、そこでは、人格と能力とが特有の仕方で結びつけられていること（「教育学的人格」と呼ぶ）が示されている。第８章では、1960～70 年代において優生学的政策の進展に抵抗した「青い芝の会」の言説と、同時期の教育学における能力主義批判の言説とを比較しながら、「教育学的人格」像を下敷きにした後者が、優生学と〈連接〉したものであったことが示されている。

結論では、以上の知見を整理した後、戦後の教育学がさまざまな回路によって優生学と〈連接〉してきたことをふまえつつ、どういう回路をどう組み換えれば他者の存在を脅かさない教育学が可能なのかについて、試論的な議論を展開している。

本論文は、これまできちんと検討されてくることがなかった優生学と戦前・戦後の教育学との関係を、直接的な関係だけでなく、論理的な相同性にまで考察を広げて整理したものである。独自に設定された分析概念の曖昧さによる論理の甘さや、歴史的な検討と結論部での展望との間にある距離など、いくつかの弱点はある。しかし、この主題にありがちな安易なレッテル貼りに陥らず、戦後教育学のいくつかの言説群を綿密に検討し、そこに隠れている前提や思いがけない論理のつながりを明らかにしており、戦後の教育学に内包された偏倚の一端を浮き彫りにしているといえる。教育学のこれからのあり方を考える上でも意義ある論文であり、今後の教育学研究に重要な貢献をなすものと考えられる。以上により、博士（教育学）の学位論文として十分な水準に達しているものと認められる。